



帰国生入試を始めてから4年が経過しました。帰国生入試で入学した生徒は100人を超えました。そして、第1回の入学生はもう高校2年生です。また、昨年からは英語入試も導入しました。一方、ほんの数ヶ月のことで帰国生入試枠を利用できず、一般入試を選択せざるを得なかった受験生もたくさんいると思います。そうすると、本校には相当数の海外生活体験者がいるのではないかと思います。しかし、最近増えつつある海外志向というのは海外生活体験者に限られたことではありません。様々な分野で「グローバル社会」といわれますが、それに限らず政治・経済・学問・・・あらゆる面において、外国に行ったり、外国の人と共に学び、仕事をするという機会が今後増えていくことは確実です。「グローバル通信」でも海外で学んでいる卒業生を紹介してきました。そこで、海城学園もいよいよ本格的に海外進学の支援をしていくことになりました。

海外進学に関しては、学校の通常授業の成績が大きな比重を占めますが、例えばアメリカの大学を目指すには、TOEFL、SAT、ESSAYなどの対策が必要になってきます。こうしたものは学校のカリキュラムの中では対応しきれません。その為、通常の講習とは別に特別な講座を用意することにしました。

講座の内容と講師については4月15日に開催した「海外進学ガイダンス」（中学2年生以上対象）で紹介しました。現段階で20名を超える応募者がいますが、ガイダンスに参加できなかった生徒で参加の意志のある人は、25日（土）の朝までにグローバル教育部の部屋まで来て下さい。希望通りにはならないかも知れませんが、追加申し込みを受け付けます。講座の開設日は以下ようになります。なお、受講料は無料ですが、テキストが必要な場合は実費となります。

曜日	時間	内容
水	15時45分～16時45分	16時55分～17時55分
	TOEFL、SAT、ESSAY	グローバル同好会の指導およびディベート
金	15時25分～16時25分	16時35分～17時35分
	TOEFL、SAT、ESSAY	TOEFL、SAT、ESSAY

（講座開設回数は未定。継続して出席することが条件です。上記は変更の可能性もあります。）
では、講師のビル先生に自己紹介をしてもらいます。（日本語は堪能でいらっしゃいます）

William Veon ヴィアン・ウィリアム (Bill ビル)

私は、アメリカ合衆国フロリダ州で生まれ育ち、サウスフロリダ州立大学にて化学工学を学びました。そのかわり語学にも深い興味を持ち、語学留学のため中国の南開大学にて半年間学びました。

その後ピッツバーグ大学院に奨学生として進学し、生物工学を学ぶと同時に大学の研究室でアシスタント研究員及びティーチングアシスタントとして勤務しました。昨年、博士号取得とともに来日し、現在は「地球の歩き方」進学課にて日本人学生の海外留学をサポートする進学アドバイザーとして勤務しています。

この度、海城学園にて、みなさんが海外で活躍されるためのお手伝いができる機会をいただき、大変うれしく思っています。海外の大学についての幅広い知識を活かし、生徒の皆さん一人一人に最適な進

学先のご提案とその実現のためのサポートをさせていただきます。海外での進学に少しでも興味のある方は、お気軽にご相談ください。

「地球村」報告2

「地球村」プログラムは、今後海城の教育の取り組みとして何らかの形で取り入れたいと考えています。このプログラムの特色はいくつか挙げられますが、一言でいうならば、「物事を俯瞰的にとらえ、調べ、考え、発信する」ということでしょうか。そのためには様々な事に興味を持ち、自ら動き、自ら考える、ということが大切であり、同時に己を知ることも必要になってきます。つまり、総合的な学習の要素を持っているのです。世界に羽ばたき、世界で活躍する人間は勿論のこと、国内に留まって学び、仕事をしていこうとする人たちにも必要不可欠な「学びの姿勢」を身に付けることができると思います。



（スピーチに向けての準備）

さて、今回「地球村」に参加した3人の生徒諸君が感想文を寄せてくれました。ここに紹介致します。

中学3年 鈴木 泰我

今回の合宿はとても多くのことを学ぶ機会となりました。はじめは親に進められて参加することになったのですが、その後に発表されたプログラムを見て面白そうだと感じていました。

いくつもプログラムをやりましたが、どれもとても新しい考えばかりでした。エラトステネスや、シルクロードは名前だけは知っていたけどとても面白かったです。セヴァン・鈴木さんのスピーチには感動しました。あれほどのインパクトを持って世界に発信する力を持っている人がいることにとても驚きました。

今回の合宿を通して結局考えたことは学校の勉強は非常に大事だということです。いろいろなことを考えるにあたって必要なのは学校で学ぶ基礎知識だとわかりました。大きなことを言う前にしっかり勉強をしていき、物事を正しく俯瞰できるグローバル人材になろうと思います。とても良い機会を与えてくださり、ありがとうございました。

高校1年 甲斐 亮吾

昨今、「グローバル化・グローバル人材」といった言葉をよく耳にする。だが、言葉だけが一人歩きしてそもそもの意味をはき違えているような使い方も散見される。かくいう自分もよくわかっていなかった。今回の地球村はそれに対して答えを与えてくれたと思う。グローバル人材とは何か。それは地球まるごと物事を捉える俯瞰視点を持ち、二項対立ではなく軸を二つ取り最適解を求められ、様々な情報をつなげてインテリジェンス化できる人物、ということだった。この中で一番自分に欠けているのは俯瞰視点だと考えた。社会のレポートなどでその問題を調べ、自分なりの見解を出していくことは出来るようになったと思う。しかし、それを自分事として捉え、どう行動すればよいのかといったところまで考えられていなかった。「臆病な批評家であるよりはハングリーなバカ者であれ」といった言葉があるように自分事として物事を捉え、行動できる人物になりたい。

高校2年 茂田 治樹

今回このキャンプは、生徒が17名、先生方8名の引率のもと、行われました。少人数でかつ先生対生徒の割合が高かったこともあり、生徒一人ひとりが十分なサポートを受けながら、各議題に対する自分の意見を活発に発信する場が与えられ、大変有意義な三日間を過ごすことが出来ました。

本プログラムの内容は歴史的出来事を背景に、今、世界の人々はどのような事柄を機軸に考え、

行動するかを考察するというものでした。また、この活動の中には生徒主体で行うものもあり、グループディスカッションを通じて生徒間で意見を深め、最終日には一人ひとり自分の関心のある国際問題をテーマにスピーチをしました。

今回、地球村に行って良かったと思った最大の点は、とにかく自分の考えを述べる機会がたくさんあったことです。自分の意見を持つことの重要性を知り、また発信する際のテクニックなども学べました。自分の意見に対する率直なフィードバックもたくさん頂け、知識を深められる場ともなりました。是非次の機会にはもっと多くの生徒が参加されたらいいと思いました。

※「グローバル通信 17 号」そして本号でも名前が出てきた、「地球村」で紹介された「セヴァン・スズキ」さんの 1992 年リオデジャネイロ「環境サミット」での演説を掲載しておきます。この時、彼女は 12 歳でした。

Hello, I'm Severn Suzuki speaking for E.C.O. - The Environmental Children's organization.

We are a group of twelve and thirteen-year-olds from Canada trying to make a difference: Vanessa Suttie, Morgan Geisler, Michelle Quigg and me. We raised all the money ourselves to come six thousand miles to tell you adults you must change your ways. Coming here today, I have no hidden agenda. I am fighting for my future.

Losing my future is not like losing an election or a few points on the stock market. I am here to speak for all generations to come.

I am here to speak on behalf of the starving children around the world whose cries go unheard. I am here to speak for the countless animals dying across this planet because they have nowhere left to go. We cannot afford to be not heard.

I am afraid to go out in the sun now because of the holes in the ozone. I am afraid to breathe the air because I don't know what chemicals are in it.

I used to go fishing in Vancouver with my dad until just a few years ago we found the fish full of cancers. And now we hear about animals and plants going extinct every day - vanishing forever.

In my life, I have dreamt of seeing the great herds of wild animals, jungles and rainforests full of birds and butterflies, but now I wonder if they will even exist for my children to see.

Did you have to worry about these little things when you were my age? All this is happening before our eyes and yet we act as if we have all the time we want and all the solutions.

I'm only a child and I don't have all the solutions, but I want you to realize, neither do you!

You don't know how to fix the holes in our ozone layer. You don't know how to bring salmon back up a dead stream. You don't know how to bring back an animal now extinct. And you can't bring back forests that once grew where there is now desert. If you don't know how to fix it, please stop breaking it!

Here, you may be delegates of your governments, business people, organizers, reporters or politicians - but really you are mothers and fathers, brothers and sister, aunts and uncles - and all of you are somebody's child.

I'm only a child yet I know we are all part of a family, five billion strong, in fact, 30 million species

strong and we all share the same air, water and soil - borders and governments will never change that. I'm only a child yet I know we are all in this together and should act as one single world towards one single goal. In my anger, I am not blind, and in my fear, I am not afraid to tell the world how I feel.

In my country, we make so much waste, we buy and throw away, buy and throw away, and yet northern countries will not share with the needy. Even when we have more than enough, we are afraid to lose some of our wealth, afraid to share.

In Canada, we live the privileged life, with plenty of food, water and shelter - we have watches, bicycles, computers and television sets.

Two days ago here in Brazil, we were shocked when we spent some time with some children living on the streets. And this is what one child told us: "I wish I was rich and if I were, I would give all the street children food, clothes, medicine, shelter and love and affection."

If a child on the street who has nothing, is willing to share, why are we who have everything still so greedy? I can't stop thinking that these children are my age, that it makes a tremendous difference where you are born, that I could be one of those children living in the Favellas of Rio; I could be a child starving in Somalia; a victim of war in the Middle East or a beggar in India.

I'm only a child yet I know if all the money spent on war was spent on ending poverty and finding environmental answers, what a wonderful place this earth would be!

At school, even in kindergarten, you teach us to behave in the world. You teach us:

not to fight with others,

to work things out,

to respect others,

to clean up our mess,

not to hurt other creatures

to share - not be greedy

Then why do you go out and do the things you tell us not to do?

Do not forget why you're attending these conferences, who you're doing this for - we are your own children.

You are deciding what kind of world we will grow up in. Parents should be able to comfort their children by saying "everything's going to be alright", "we're doing the best we can" and "it's not the end of the world".

But I don't think you can say that to us anymore. Are we even on your list of priorities? My father always says "You are what you do, not what you say."

Well, what you do makes me cry at night. you grown ups say you love us. I challenge you, please make your actions reflect your words.

Thank you for listening.

(「ナマケモノ倶楽部」より転載)